

演題募集のお知らせ

第19回日本音楽療法学会学術大会での研究発表を募集します。今大会では自由研究発表と課題研究発表を募集します。発表形式は口演発表もしくはポスター発表（自由研究）です。

◆ 応募資格

- ①応募時点で日本音楽療法学会の正会員であり、第19回大会参加費を納入済みであること。また、2018年度以前の入会者は2018年度の学会年会費を納入済であること。
- ②共同研究者・共同発表者も本学会員に限る。
- ③学生会員は正会員との共同研究であれば発表が可能だが、その場合でも筆頭発表者になることはできない。
- ④非会員は共同研究者・共同発表者となることはできない。演題原稿に氏名を記載することもできないため注意すること。

◆ 自由研究

口演発表・・・・・・・・A枠 発表15分、質疑応答5分
B枠 発表30分、質疑応答10分
*応募多数の場合は、A枠のみとします。

ポスター発表・・・・・・・・口頭発表5分、質疑応答5分
*応募多数の場合は、口頭発表ではなく在席責任時間をお願いすることもあります。
指定された時間に在席してください。在席しない場合はポイントになりません。
在席責任時間は事前案内でお知らせいたします。

演題原稿の必須項目 ・事例研究の場合：「対象者および目標」「方法」「経過および結果」「考察」
・学術研究の場合：「研究の目的」「方法」「結果」「考察」「結語」

募集領域

1. 児童：0～18歳の子どもの対象とした事例研究、または学術研究（含実験）
2. 成人一般：19～64歳の青年・成人を対象とした事例研究、または学術研究（含実験）
3. 高齢者：65歳以上の高齢者を対象とした事例研究、または学術研究（含実験）
4. 精神科：特に精神科や心療内科に関する事例研究、または学術研究（含実験）
5. 緩和ケア：特にホスピスやスピリチュアリティの領域に関する事例研究、または学術研究（含実験）
6. その他：上記1～5に含まれない領域の事例研究、または学術研究（含実験）

◆ 課題研究

口演発表・・・・・・・・質疑応答含め45分～60分を予定
発表区分は下記のABCとなっています。

演題原稿の必須項目 ○課題研究A【関係性の展開】（事例研究のみ）
I：はじめに II：事例の概要[C1について][セッションの構造]
III：セラピーの過程 IV：考察
（III・IVについては、段階ごとに考察していただいてもかまいません）

○課題研究B【日本の文化土壌と音楽療法】

- ・事例研究の場合：「対象者」「目標および方法」「経過および結果」「考察」
- ・学術研究の場合：「研究の目的」「方法」「結果」「考察」「結語」

○課題研究C【音楽の共有時空間】

- ・事例研究の場合：「対象者」「目標および方法」「経過および結果」「考察」
- ・学術研究の場合：「研究の目的」「方法」「結果」「考察」「結語」

A：【関係性の展開】＜セラピーにおけるセラピストとクライアントとの交流の質的変遷に着目して、臨床を検討・考察してみてください。＞

セッションの回数を重ね、何らかの結果を得て療法目標を達成した場合、用いた手法や手段（どのような方法で、どのような音楽などで）を客観的に振り返り、結果をもたらした要因を考察し明らかにしていくことは、音楽療法の発展のためには重要なことです。しかし、それらの手法や手段は、それを用いるセラピストがクライアントから何を感得し、どのような思いで向き合っているか、あるいは、クライアントの何に影響を受けて音・音楽、言葉を発しているか、というようなセラピストの内面の経験が大いに影響していると考えます。つまり、セラピストの感性やクライアントに対する姿勢などの主観性が手法や手段を裏打ちしているといえるでしょう。そして、セラピスト自身がセッションでの体験を自身のことも含めてじっくり吟味して振り返ることで、クライアントへの理解がより深まる、とも考えます。

この課題研究では、研究においてどちらかというとな非科学的とされがちな、このような主観的な部分に目を向けて、クライアントとセラピストの関わり合いの中で起こる一期一会の事象を丁寧に振り返り、考察し、セラピーにおけるクライアントの変化を促す要因を「交流」という視点から探求することをお勧めしています。

書き方としましては、客観的な事象とそれに伴う主観を含めた考察をステージごとにまとめていただくといいかと思います。あるいは、全セッションではなく、特筆したいセッションを抽出してみてもいいかもしれません。必ず、セラピストとクライアントとの相互の関係の中から考察して下さい。これにより、クライアントへの理解を深め、臨床の質の向上へと前進することを期待いたします。

（文責：石村真紀、後藤浩子、高石公資）

B：【日本の文化土壌と音楽療法】＜音楽療法における“音楽”を、日本と西洋、都会と故郷、若者と高齢者・・・など地域土壌に根ざした様々な“文化”の観点から考察する研究です。＞

「あれ？みなさんどうしてノラないの？」初学者の頃、音楽療法の現場で楽譜通りに歌謡曲などを伴奏して、そう思ったことはありませんか。多くの日本の現場では、西洋文化圏において専門領域として確立・制度化してきた音楽療法の理論や技法を、文化や風土の異なる日本の現場へそのまま当てはめようとして、相手との間に「あれ？」という「文化摩擦」が生じているかもしれません。

平安期は『源氏物語』若菜下の住吉大社場面のように自然音と楽音を差別せず情景とし、江戸期には琴のすり爪・三味線のサワリ・義太夫語りのように、西洋音楽では雑音とされる音や声そのものの色や感触にこだわるのも日本の音や音楽文化の特徴です。今日の現場で歌の前奏を弾きはじめたら相手が手を打ち体を揺る現象も、日本の伝統では純粋器楽は少なく、ほとんど歌と舞いを伴っていたことと関係あると思われます。現在の現場でよくみられる「歌体操」や「当て振り」は、この文化土壌から生まれた技法といえましょう。

都会の若者はカラオケでスター歌手通りに歌い踊るのに、災害被災地でその土地の民謡やわらべ歌の節にのせて自分の本音を歌うことや、昔からのお祭りや踊りが、個人にも集団にも力を呼び覚ますことが確認されています。そのように地域の文化土壌に組み込まれた癒しの装置はないか？日本文化と西洋音楽との双方を視野に入れられる私たちならではの気づきはないか？リズムをみても稲作地帯の静かなすり足と山岳地帯の跳ね足、沖縄の波乗りのような後打ち、日本と西洋、都会と故郷、高齢者と若者、各民族独自のリズム感・・・様々な「文化」の違いに気づき、現場での悩み・失敗・工夫した例が、対象者の文化を生かす音楽療法のヒントにつながるかもしれません。文化土壌に根ざした音楽療法をテーマとした研究発表をお待ちしています。

（文責：牧野英一郎、益子務、松本佳久子）

C：【音楽の共有時空間】＜対象者との共有時空間生成に関与した音（音楽）を分析・考察し、音楽療法士の専門性・独自性を探求する研究です。＞

音楽療法の課題研究テーマとして音楽の共有時空間を提案するモチーフは、他職種の方々や社会一般から、音楽療法士というのは何をする人？と聞かれたときに端的に説明できるようにするために、音楽療法士の職業的専門性のコアとして、音楽の共有時空間が作れる人と言えるようにすることです。

音楽の共有時空間とは、対象者が単に音楽療法士が提供した音（音楽）を受容するのみの段階を指すのではなく、音楽療法士が対象者を理解し、意図的計画的に音楽を提供した結果、対象者が音（音楽）を提供する音楽療

法士に気づき、音楽療法士との間に感情交流が生まれ、対象者に音楽療法の目標に関わる変化の兆しがみられた状況と考えています。

音楽の共有時空間生成場面について、提案グループではこれまで、精神科・障害児・高齢者・介護予防の事例からひも解き、各領域における特色そして領域を超えた一致点について確認していく研究を進めています。

応募にあたり、事例研究においては、対象者の特徴と音楽療法の目標から起稿し、その目標を実現するために如何に音楽の共有時空間を生成させるかの方法を明記することがポイントになります。そして、経過と結果では、音楽の共有時空間の生成、深化、拡大の事実、及びその結果引き起こされた対象者の変化を記述し、考察では、目標の実現状況と対象者の変化を導いた音楽の共有時空間の生成要因について分析的に考察することを望みます。

なお、音楽療法の事例研究発表は、克明な記録が求められるところから集団セッションであっても個人に焦点を当てて分析することが一般化してきました。しかしながら音楽の共有時空間は、生成・深化・拡大という現象を分析する必要があるために、集団セッションの全体を取り上げても良いと考えます。

先達の研究や実践に類似の論究がありますし、海外の先行研究にも学ぶ必要があります。これらの整理や概念規定について学術研究として発表されることも期待しています。

(文責：岩井澤奈巳、大前哲彦、山田由紀子、山本賀子)

◆ 応募上の注意

- ・研究発表は、1人1演題のみです。
- ・応募時に希望する発表形式を選択してください。ただし、査読・検討の結果、発表形式が変更される場合があります。
- ・採択された方には発表方法（口演・ポスター）の詳細について通知しますが、これに関する変更は受け付けませんのでご了承ください。また、発表日時は事前案内でご確認ください。
- ・課題研究発表の査読によって内容が非該当とされた場合は、「自由研究発表」への応募とさせていただき、演題原稿を1枚に書き直すとともに発表形式の変更をお願いする場合がありますので、予めご了承ください。

◆ 演題原稿の体裁・注意

必ず指定の書式（テンプレート）を大会ホームページ「各種発表応募」メニューからダウンロードして、演題原稿を作成してください。

- ・原稿は、図表（カラー不可）も含めて自由研究においてはA4サイズ1枚、課題研究の場合はA4サイズ2枚にまとめてください。
- ・Wordで作成し、上下左右の余白はすべて20mm、1行の文字数は48字、総行数は40行に設定してください。
- ・本文の字体は明朝体、文字サイズは10.5ポイントで入力してください。演題は中央寄せでゴシック体太字12ポイント、氏名（所属）は右寄せでゴシック体太字11ポイント、項目（方法、考察等）は、ゴシック体太字10.5ポイントで作成してください。
- ・共同発表者のある場合のみ、筆頭発表者の氏名の前に○をつけてください。
- ・募集締め切り後は、提出された原稿の修正は一切受け付けません。
- ・その他詳細につきましては、第3次案内をご覧ください
- ・書式（テンプレート）のダウンロードは4月8日からです。